

出会い・ふれあい・支え合いを目指した

第9回「介護保険推進全国サミット in とうかいむら」

新しいサービスの創造



来る10月16日(木)と17日(金)の第9回「介護保険推進全国サミット in とうかいむら」まで二十日余り——。実行委員会事務局では、県内初の開催に当たり、全国からの多くの参加者を円滑に迎える準備を進めています。中でも、メイン会場となる東海文化センターでは、ホールに入場できない方々に備え、屋外に大型スクリーン搭載車両を配置し、会場内の様子を実況中継するほか、福祉車両・用具の展示コーナー、地元特産物等の物産販売ブースなどを設けます。多くのご来場をお待ちしていますので、皆さんお誘い合わせの上、ぜひお越しください。

連載その③

【問合せ】第9回「介護保険推進全国サミット in とうかいむら」実行委員会事務局(福祉部介護福祉課内) ☎ 282-1711 内線 1165 ウェブサイト <http://www.vill.tokai.ibaraki.jp/tokai2008/top.htm> ※サミットのご案内は、「広報とうかい」(平成20年8月10日号・9月10日号)にも掲載があります。



広報とうかい 9月25日号

発行 東海村

編集 総務部総務課

〒319-1192

那珂郡東海村東海三丁目7番1号

☎ 029(282)1711

印刷 大富印刷株



ふるさと歴訪
歴史を再発見

水城「真崎城」物語

『のぼうの城』著者・和田竜／小学館という時代小説がベストセラーになっています。豊臣秀吉の小田原攻めの時に、石田三成の大軍勢の水攻めにあつてもついに落ちなかつた北武蔵の湖沼に浮かぶ水城「忍城」がその舞台です。東海村にも、かつて同じような水城がありました。村松の「真崎城」(正木城)です。今回は、この「真崎城」についてお話しします。

佐竹氏の一族がこの地に住み着いたのは、鎌倉時代も半ばを過ぎたころのことです。しかし当時、鎌倉時代の武士が山や尾根の上に城郭を築くことはありませんから、このころの真崎氏の館は別の場所にあったようです。真崎氏によって「真崎城」が造られたのは、室町から戦国時代のことと思われます。このころの村松の景観は、現在とは大きく異なっていました。江戸末期から近代に至る干拓事業により水田地帯に生まれ変わった「正木浦」(真崎浦。細浦なども含む)が中世に海に通じ、大きな潟湖を形成していたのです。中世には船が浜付け(係留)されることは



(写真中央) 村松図書館
写真中央の尾根が「真崎城」として使われていた。

茨城大学人文学部教授

高橋 修

なく、人工の港湾もありません。潟湖などを利用して港が営まれるのが普通でした。おそらく「正木浦」には、村松山虚空蔵堂への参拝の舟や太平洋を奥州へと向かう船舶が利用する港が営まれていたでしょう。陸上交通に目を転じて見ると、久慈川の渡河点から石神外宿・石神内宿を経て南下する道や菅谷(那珂市)・高野(ひたちなか市)から東に進む道は、いずれも村松宿に向かっています。水戸から勝倉(ひたちなか市)を経て北上する道も村松宿を経由します。「正木浦」の中に突き出た半島上に築かれた「真崎城」は、水陸交通の交わる村松宿や港を、しっかりと押さえることができる立地条件を備えていたのです。現在、「真崎城」跡には、3か所の曲輪(一定の区域の周囲に築いた土・石の囲い)を区画する堀切(地を掘って切り通した堀)や周囲を巡る土塁の一部などが残されています。藪が茂って容易には近づけません。近くに立って少しだけ想像力を働かせると、「正木浦の水城「真崎城」の姿をしのぶことができると思います。

〈東海村公式ホームページ〉 <http://www.vill.tokai.ibaraki.jp/>



「広報とうかい」は、環境に配慮して「大豆インキ」と「古紙/パルプ配合率100%再生紙」を使用しています。